

あるとき、かめがさんぽしていると、ぞうに会いました。かめはぞうにいいました。
「ぞうさん、あんたはぼくより大きいって思ってる？」

「もちろん」

「ふうん、そう」

ぞうは、

「どうしてそんなこというんだ」とききました。かめはいいました。

「じゃあ、あんたはじぶんの頭のとっぺんを見たことがあるかい」

「なんだって」

「ぼくはあんたの頭のとっぺんを見たことがあるよ。あんたの頭なんか、ひととびでとびこえられるもの」

ぞうはびっくりして、

「おまえが？おまえなんて、てんで小さいじゃないか」といいました。

「それでもさ」

「じゃあやってごらんよ。ほんとにとべるかどうかや見てやろう」と、ぞうがいうと、かめはいいました。

「きょうはだめ。遠くから歩いてきてつかれてるから」

「そら見る。そんなのうそに決まってるさ」

「うそだって？」

「そうさ、うそつきさ。おまえなんか、ぼくの頭をとびこえられるわけがない」
すると、かめは、

「そんなら、あした、ここへおいでよ。ぼくがどんなにじょうずにとべるか、見せてあげるから」といいました。

ぞうがいつてしまうと、かめはいそいそでおくさんをよんできて、道ばたのやぶのなかくしました。

つぎの朝、ぞうがやってきました。かめは、

「おはよう。ほんとに來たんだね」といいました。ぞうは、

「そうさ。ちゃんとやってきたよ。かめがとびはねるのを、ぜひ見たいと思ってるな」といいました。

「じゃあ、こっちへおいで。ここに立ってごらん」

ぞうは、道のまんなかにどっしりと立ちました。かめは、道のはしに立ちました。道のむこうがわには、おくさんがかくれています。

「さあ、かめさん、とんでごらんよ」と、ぞうがいいました。かめは、

「えいっ」と、大声でさけんとびあがりました。そのとたん、道のむこうがわで、
「やつ」と、かけ声がしました。ぞうが首をまわしてそつちを見ると、もうかめがいま

した。

「おどろいた。あつというまだなあ。でも、もういちどやってみてよ。とぶところがよく見えなかったんだ」と、ぞうはいいました。すると、こんどはかめのおくさんが、

「えいっ」とさけびました。ぞうがふりむこうとしたとたん、

「やつ」と声がして、見ると、こちらがわにもうかめがいました。ぞうはいいました。

「わかった。たしかにおまえはぼくの頭をとびこえることができるよ。でも、かけっこなら、ぜったいに負けないからな」

かめは、

「それはどうかな。やってみようか」といいました。「だけど、きょうは力いっぱいといんだから、足がくたびれちゃった。あしたにしようよ」

「ああ、いいとも」

「じゃあ、あすの朝早く、またここにおいで」

その晩、かめは、子どもたちやいとこたち、親戚じゅうのかめをみんな集めました。そして、いっぴきずつ、道のとちゅうのやぶの中にかくしました。それからいいました。

「みんなよく聞いて。ぞうが近づいてきたら道に出て、かけっこしているふりをして」つぎの朝、ぞうがやってきて、大きな声でいいました。

「おうい、かめさん」

「ここだよ」

「さあ、かけっこしよう」

「ようい、どん！」

ぞうとかめはそろってとびだしました。

ぞうは、力いっぱい走りました。

ドタツ、ドタツ、ドタツ。

ぞうは、しばらくかけてから、かめをどのくらいひきはなしたか見ようと思って、大声でさけびました。

「おうい、かめさん」

すると、ずっと前のほうで、

「なんだい」と、声がしました。ぞうはまた、むちゅうになって走りました。

ぞうは、長いことわき目もふらず走ってから、もういちどかめをどのくらいひきはなしたか見ようと思いました。

「おうい、かめさん」

「なんだい」

また、ずっと前のほうで声がしました。

ぞうは、いつまでたっても、かめを追い抜くことができませんでたとき。

原話…『世界のメルヒェン図書館 8』小澤俊夫編訳／ぎょうせい

再話…村上郁

